

「宣教する教会」（アンテオケ教会に学ぶ）

使徒の働き 11章19～30節 13章1～3節

はじめに

今日は、日本長老教会設立記念礼拝です。日本長老教会は、1993年に日本基督長老教会と日本福音長老教会が合同して出来ました。教会数65、教師90、中会は東京、神奈川、東関東、武蔵、中部、西部の6中会から成っています。

さて、キリスト教会は、2000年前にエルサレムから始まりましたが、当時のユダヤ教指導者による迫害が起こり、キリストの弟子たちは地方に散らされました。しかし、それがかえってキリストの福音を広める結果になりました。キリストの弟子となった人々は、迫害に挫けるどころか、自分たちの行く先々で福音を伝えました。それは、彼らがキリストの福音を何にも代えがたいものと思っていたからです。キリストによって自分たちの背きの罪は赦され、神の子とされて生きるという大きな希望を見出しました。

弟子の中には北に向かい、フェニキヤ、キプロス、アンテオケにまで進んで行く者がいました。このシリアのアンテオケで弟子たちは、初めてユダヤ人以外のギリシャ人に大々的に福音を語ったのです。すると大ぜいの人々が回心し、初めて異邦人教会ができました。

エルサレム教会は国内宣教の中心であるとともに、使徒たちがいる教会として、初代教会の母教会であり続けましたが、アンテオケに生まれた教会は、世界宣教のキーステーションの役割をになう教会となったのです。今朝は、異邦人世界に始めて出来たこのアンテオケ教会から学ぶことにしましょう。

1. アンテオケ教会は、どのようにして始まったか。

(1) 散らされた信徒たちが伝道しました (19)

アンテオケでの伝道は、「キプロス人とクレネ人」の幾人かによってなされました。名前も記されていません。名もない信徒たちによる伝道です。伝道は、職業伝道者によってなされるとは限りません。初代教会では弟子はすべて伝道者でした。福音を伝えることは、彼らにとっては当たり前の事でした。

私は、1965年に川崎市の郊外井田という場所で伝道を始めました。その頃の私は主に献身をしていましたが、まだ按手礼を受けておらず、牧師の資格はありませんでした。でも、自分の家で伝道を始めると、子どもたちがたくさん集まり、大人の人々も30人くらい集まるようになりました。やがて按手礼を受け、長老教会に加盟しました。これが菊名西教会の始まりです。

(2) 思い切った発想で伝道しました（初の大々的な異邦人伝道）（20）。

アンテオケで伝道した弟子には、エチオピアの宦官の救いや、コルネリオ一族の回心のことが伝わっていたのでしょうか。分かりません。ともかく彼らは、ここで思い切ってギリシャ人に「主イエスのこと」を宣べ伝えたのです。それまでの伝道がおもにユダヤ人に対してであったのに比べると、それは、思い切った行為でした。それは、「全世界に出て行って福音を伝えなさい」とお命じになったイエス様の命令に従った結果でした。アンテオケは、ローマ、アレクサンドリアに次ぐローマ帝国第三の都市で、人口は70万人とも言われていました。これだけ多くの人がいるのに、福音を伝えないわけではないと確信したのでしょうか。

(3) 主の御手が彼らとともにあったので、大ぜいの人が信じて主に立ち返りました（21）

その結果、多くの人が主に立ち返りました。それは「主の御手が彼らとともにあった」からだということです。人が主に立ち返るのは、単なる人間的な方策ではありません。「主の御手がともにない」伝道は、人を集めることは出来ても、主に立ち返らせることはできません。回心は、聖霊のみわざですから。

2. アンテオケ教会はどのようにして作られたか。

(1) 常に主にとどまっているように（23）

さて、信徒の数が増えました。これからどうするか。伝道したのは信徒ですが、彼らは信徒を育て、教会を作ることは出来ません。そこでエルサレム教会は、キプロス生まれのレビ人であるバルナバ（4:36）をアンテオケに派遣しました。バルナバは、エルサレム教会で使徒たちの信頼が厚く、回心したばかりのサウロ（後の使徒パウロ）を導き、エルサレム教会の仲間入りさせました。

キプロス出身のバルナバは、ギリシャ語も出来、ギリシャ人への理解もあり、その上「りっぱな人で、聖霊と信仰に満ちた人」でした。

バルナバは、アンテオケに来て、「神の恵み」を見ました。これは、そこに起きていることが「神の恵み」であると見ることが出来た彼の信仰です。そこで起きていることが、人間的な興奮や狂信的な活動ではなく、神の確かな恵みの結果であることをバルナバは見抜いたのです。

彼は「みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているように」励ましました。主をを信じるだけでなく、常に主に留まっていることが大切です。

さらにバルナバは、タルソまで出かけて行ってサウロ（22:3）を見つけだし協力者としました。このサウロこそ、後に異邦人の使徒としてローマ帝国の各地に福音を伝え、教会を作ったパウロです。バルナバは、自分の限界をわきまえる人でした。教会にはパウロのようなみことばを教えることの出来る人が必要だと感じたので、タルソまで行き、パウロの協力を求めたのです。バルナバとサウロは、

教会に集まり、大ぜいの人に時間をかけてみことばを教えました（26）。

（2）クリスチャンと呼ばれるようになる（26）

「弟子たちは、アンテオケで初めて「キリスト者（クリスチャン）と呼ばれるようになった」とあります。自分からクリスチャンと言ったのではなく、「呼ばれるようになった」ことに注意してください。弟子たちの生活が、いかにキリスト中心であり、キリストにあっていきていることが人々にはっきり分かったのです。あなたの生活は、キリスト中心ですか？ キリストをあかししていますか？

（3）礼拝、断食、祈りの教会（13：2-3）

「アンテオケには、バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン（ニゲルはアフリカ出身者と思われる）、クレネ人ルキオ、国主ヘロデの乳兄弟マナエン、サウロなどという預言者や教師がいた」とありますが、豊かな働き人が育っていました。

彼らが礼拝、断食、祈りをささげていると、聖霊が「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい」と言われました。彼らは、その任務が何か分かりました。それは世界宣教という大きな任務でした。この大きなビジョンは、彼らが考え出したものではなく、「礼拝、断食、祈り」の中で、聖霊が彼らに伝えたものです。真のビジョンは「礼拝、断食、祈り」から生まれることを学びましょう。

3. アンテオケ教会の成長

アンテオケ教会の成長は、次の点に見られます。

（1）他教会を援助する教会（11：27-30）

ユダヤ地方を襲った飢饉を聞いた弟子たちは、力に応じて、救援物資・援助金を送ることを決め、バルナバとサウロをエルサレムに送りました。バルナバとサウルという指導者を送ったのは、アンテオケ教会のヴィジョンに理解を求めることも視野にあったのかもしれませんが。

（2）世界宣教の任務を担う教会（13:1-3）

主は、この教会に世界宣教という大きな任務をお与えになりました。そのために、まずバルナバとサウロが選ばれました。アンテオケ教会は、最高の指導者を送り出しました。以後、この教会は世界宣教のキーステーションとなり、宣教師たちを派遣して、彼らを支えていくこととなります。アンテオケ教会はその後3回のパウロを世界宣教に送り出します。それは、宣教師の生活費、旅費、伝道費など莫大な

費用を要する事だったと思いますが、教会はそれを全部負担したのです。その結果、ガラテヤ、マケドニヤ、アカヤ、小アジアなどのローマ帝国の諸地方にキリストの教会が出来ていくことになります。

(3) 神学論争に勝つ教会

ユダヤ人のキリスト者は、アンテオケに来て、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ救われない」と教えていました。そこでパウロやバルナバと彼らの間に激しい論争が起きました。教会はその解決のため、パウロ、バルナバ及び信徒の数人をエルサレム教会に派遣し、長老たちの裁可を求めました。結果は、パウロたちの主張が認められたのです。アンテオケ教会は、聖書のみことばにしっかりと立って、間違った教えを見抜き、論破する神学を持つ教会に成長していました。

4. この教会に学ぶべきこと

さがみのキリスト教会は、アンテオケ教会から何を学ぶべきでしょうか。

- (1) 迫害にも屈しない伝道精神
- (2) 信徒による伝道
- (3) 常に主にとどまるべきこと
- (4) 礼拝、断食、祈りによる聖霊の導き
- (5) 世界を視野に入れた宣教活動